ひょうご水百景

No.6　武庫川（尼崎市常松・西昆陽）

～西国街道・髭の渡しと花の名所となったコスモス園～

写真-1 武庫川をバックに「髭の渡しコスモス園」を撮影（平成23年10月）

■ 阪神間の秋の花の名所～「髭の渡しコスモス園」

上の写真-1 は、尼崎市西昆陽（にしこや）・常松地先の武庫川河川敷約 1.3ha に開設された「髭の渡しコスモス園」です。毎年、10 月下旬から 11 月下旬にかけて、およそ 550 万本のコスモスの花が咲き、訪れる多くの市民を楽しませてくれます。

この場所は、旧西国街道にあたり、かつて「髭（ひげ）の渡し」と呼ばれた武庫川の渡し場があったところです。明治 42（1909）年に甲武橋が完成したことによってその使命を終えましたが、渡し跡には常夜燈や修験道の開祖「役行者（えんのぎょうじゃ）」を祀った行者堂、祠などが今も残されています（写真-2）。常夜燈があるということは、暗くなってからも川を渡っていたのでしょうか。

写真-2 髭の渡し跡にある常夜燈と行者堂

なお、常夜燈の南面には「常夜燈」、北面には「文政元戊寅七月」とあり、東面には「奉 天下泰平 西昆陽村」（他の文字は不鮮明）と刻まれています。西昆陽村が、文政元（1818）年７月に天下泰平を祈願してこの常夜燈を奉納したということのようです。

渡し跡周辺の土地は、昭和の末期、堤外民地の状態でミニゴルフ場として利用されていましたが、平成５（1993）年７月に兵庫県土地開発公社が先行取得し、その後県が河川事業により公社から再取得しました。

晴れて河川敷となった土地は、一時ゴミの不法投棄などで荒れ果てていましたが、平成 15（2003）年に地元住民が中心となった市民グループ「髭の渡し花咲き会」のメンバーをはじめとする多くのボランティアの努力により見事な「コスモス園」に生まれ変わりました。現在も多くのボランティアや県・市の支援により管理運営されていて、今ではすっかり阪神間の秋の花の名所になっています。

■ 「脇往還」といえど京都と下関を結ぶ重要な街道だった西国街道

戦乱の世が終わり江戸時代になると、幕府は日本橋を一里塚の元標として全国に一里塚を設け、交通制度を確立します。そして、中央と地方を結ぶ交通路として「街道」が整備されました。主要街道は、江戸を中心とした五街道（東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道）で、山陽道は脇往還の位置づけです。江戸が中心になっているので「脇往還」の位置づけは止むを得ませんが、そうはいっても、明石・姫路・岡山・広島などの各城下町を結び、50 の宿場を持つ重要な街道でした。萩藩地理図師の有馬喜惣太が藩主・毛利氏の参勤交代に役立てるために作製した『中国行程記』では、山陽道・中国道・中国路・西国街道などと呼び方が変わっています（ここでは「西国街道」で統一します）。

これらの街道は、藩領内であっても江戸幕府の道中奉行支配下に置かれ、街道には宿場が指定されるとともに、人馬の継立を行う問屋場や、諸大名の宿舎としての本陣・脇本陣、そして武士や一般庶民などの宿舎であった旅籠などが整備されました。

西国街道は、京都の羅城門（東寺口）から下関の赤間関に至る脇往還として、道幅二間半（≒4.5m）と定めて再整備されたものです。下関から関門海峡を越えて小倉へと至ることで、江戸と長崎を結ぶ幹線道路の一部を形成していました。これらのことは、寛永 10（1633）年の幕府巡見使の巡視を契機としましたが、寛永 12（1635）年参勤交代制の確立のためにも重要な街道であったわけです。

■ 西国街道・髭の渡しと髭茶屋

「髭の渡し」の由来は、髭の渡し跡に建てられた説明板「西国街道・髭の渡し」（西宮土木事務所・尼崎市）によると概ね以下のとおりです。

西国街道が武庫川を越えるところにあった渡し場は、街道沿いの西昆陽村に髭を生やした老人が営む茶屋があったことから「髭の渡し」と名付けられたといわれています。江戸幕府の命令によって文化３（1806）年に作成された「山崎通分間延絵図」を見ると、尼崎側の街道沿いに「髭茶屋」や「立場（たてば：人足が休憩する所）」と注記された建物が描かれています。

この渡しでは、東から西への川越えは常松村・西昆陽村の２ヶ村が月番で受け持ち、西から東への川越えは段上村・上大市村・下大市村の３ヶ村が月番で受け持っていました。例年 10 月中旬から翌年春の彼岸までは板橋が架けられ、水量が増した時には人足の肩車等による渡しが行われていましたが、後には舟での渡しが行われるようになりました。

参勤交代の大名や往来の旅人など数多くの人々に利用されてきたこの渡しは、明治の終わりに下流約 300m のところに甲武橋が架けられ、西国街道の新道（現・国道 171 号）ができるまで続きました。

図-1 甲武橋周辺の地図

また、「髭茶屋」については尼崎市西昆陽町の旧西国街道沿いに建てられた説明板「西国街道・髭茶屋」（尼崎市教育委員会）によると概ね以下のとおりです。

西国街道は、東海道伏見宿から分かれ、山崎・芥川・郡山・瀬川・昆陽の５宿を経て西宮宿に至る街道で、「京街道」とも「山崎通り」とも呼ばれた江戸時代の主要な幹線道路です。街道の宿駅の前後中間には小駅が設けられ、人足等が杖を立てて休息する立場が設けられていました。立場には茶屋が置かれるとともに正規の宿駅に泊れない臨時の客を泊める施設も認められていました。髭茶屋は、街道筋に店を開いていた西昆陽の茶屋の一軒で、草履・わらじの他、酒・一膳飯・菓子などが売られていました。

髭茶屋の名の由来は、天明８（1788）年、茶屋を経営していた安兵衛さんと徳右衛門さんの二人のうち、安兵衛さんが立派な髭を蓄えていて、「髭茶屋の安兵衛さん」と呼ばれていたことによります。

■ 髭の渡しの運営は両岸の５ヶ村で行うが、かなりの負担を伴う

渡しの管理は、尼崎側の西昆陽村・常松村、西宮側の段上村・上大市村・下大市村の５ヶ村が月番で受け持っていました。当時の武庫川の川幅は、享和３（1803）年に書かれた段上村の「村方明細帳」によると 260 間（≒460m）余りとされていますが、文化６（1809）年に書かれた伊能忠敬らの測量日記では、170 間（≒306m）となっています。６年の間に川幅が 2/3 になっていますが、何かあったのでしょうか。武庫川は洪水のたびに川筋が変わりますが、川幅が短くなっているのでちょっと気になります。川越えについて「村方明細帳」では次のように記されています。

渇水期である 10 月中旬から春の彼岸までの間は、板橋※1 を架けて置き、往来の人々はこれにより通行、増水期は、五ヶ村から川越人足を出して対応し、チチクマ（人足の肩車）や輦台（れんだい）などの方法で渡していました。輦台の場合、水深によって輦台一艇を担ぐ人足の数が異なり、「小深」で６人、「腰切り」で８人、「へそ切り」で 10 人、「乳切り」で 12 人となっており、当然のことながら渡し賃も水深が深くなるとかなりの高額になっていたようです。

諸大名・公用旅行者のほか一般旅行者の増加に伴い、５ヶ村の負担も増大したので、文政８（1825）年渡船使用許可願を役所に出し、後に許可されています。渡し賃は大名・公用旅行者・武士・僧侶などは無料だったそうです。

※1 板橋：川中に杭を打ち込み、これを支柱として、これに板の長さ２間（≒3.6m）、幅９寸（≒27cm）から１尺３寸（≒39cm）、厚さ２寸（≒6cm）の丈夫な板を 25 枚架けて仮橋とし、旅人１人から 24 文を得て渡していた。

■ 武庫川の渡し

武庫川下流部には、髭の渡しのほかに下記の４ヶ所の渡河地点があったそうです。（図-2 参照）

① 生瀬（なまぜ）**（有馬道）**

湯山（有馬温泉）を経て播磨へ向かう湯山道（有馬道、巡礼道）の渡河地点で、現在の生瀬橋付近です。

② 伊子志（いそし）**の渡し（中山観音道）**

西宮と小浜を結ぶ街道が武庫川を渡るところにあり、「伊子志の渡し」の碑が当時の船着場付近に建てられています。その碑に記載されている宝塚市教育委員会の説明によると、大正時代初期まで、伊子志付近から宝塚中学校あたりを結んで、小さな伝馬船による渡し船が運行されていたそうです。別の資料によると、渡しは、江戸時代中期に始まり、大正８（1919）年まで続いたそうです。

③ 守部（もりべ）**の渡し（津門の中道）**

「守部の渡し」は徒歩渡しで、大正９（1920）年までは舟渡しもありましたが、昭和２（1927）年の上武庫橋架設に伴い渡しは廃止されました。

この橋は、幅員 4.5m だったため、その後の交通量の増加により高欄をこする車が増え、別名「こすり橋」とか「ガリガリ橋」と呼ばれていましたが、平成 20（2008）年３月に橋長 242.0m、車道幅員 6.0m＋自歩道 4.0m、６径間連続鋼床板鈑桁の立派な橋に架け替えられました。

④ 西の渡し（中国街道）

大坂から尼崎を経て西宮へ向かう中国街道（浜街道）が武庫川を越えるところにありました。現在の尼崎市大庄西町から西宮市小松町あたりで、ここには現在武庫川橋が架かっています。なお、この付近は下流部築堤区間の中で、最も流下能力の低いところです。

図-2 武庫川の渡し位置図

■ 髭の渡しに橋を架ける～甲武橋

西国街道が武庫川を渡る地点の下流約 300m の所に、初代甲武橋が明治 42(1909)年 10 月に架けられました。甲東村（現・西宮市）と武庫村（現・尼崎市）の間に架橋されたことから、両村名を一字ずつとって「甲武橋」と命名されたようです。

『下大市今昔物語』によると、甲武橋は神戸の山本平三郎の請負で完成した鋼橋で、上部（多分床版のこと）は厚い板で、当時としてはかなり頑丈なものであったとか。その後、橋は破損したため昭和 2（1927）年 2 月に大修理が施されています。

昭和 16（1941）年頃、兵庫県が上路鋼鈑桁橋とする架け換え工事を起工しましたが戦時期のため工事が滞り、昭和 26（1951）年 3 月にようやく完成しました。これが現在の甲武橋（下り線）で、橋長 283.1m、幅員 6m です。この橋を通る国道 171 号※2 京都神戸線は、昭和 28(1953)年 5 月 18 日、新道路法（昭和 27 年 6 月公布）に基づく二級国道※3 に指定され引き続き県知事が管理することに。

その後、自動車の通行量が増えて歩行者は危なくて通れないということで、昭和 38（1963）年に橋の南側に鉄製の人道橋（W=1.5m）を継ぎ足しています。

また、車道の方も増え続ける自動車交通に対応するため、上下 2 車線ずつ計 4 車線とすることになり、昭和 40（1965）年 5 月、従来の橋の北側に 2 車線の新甲武橋が上り専用の新橋として開通し、旧橋は下り専用となりました。新橋は、橋長 283.1m、幅員 8.25m、13 径間の単純合成鈑桁橋です。

これら新旧甲武橋はいずれも兵庫県が架けたものですが、昭和 40（1965）年 4 月 1 日道路法改正により一級・二級区分が廃止されて一般国道 171 号として指定施行、同時に全線が建設省（現・国土交通省）管理の指定区間となりました。これに伴い甲武橋を含めた国道 171 号は建設省（現・国土交通省）に引き継がれることに。新橋完成直前に指定区間となりましたが、国（第二阪神国道工事事務所）への引継ぎは完成後にしているはず。その後、昭和 45（1970）年 4 月、国道 171 号の管理は第二阪神国道工事事務所から兵庫国道事務所に引き継がれています。

なお、甲武橋は武庫川の治水基準点です。

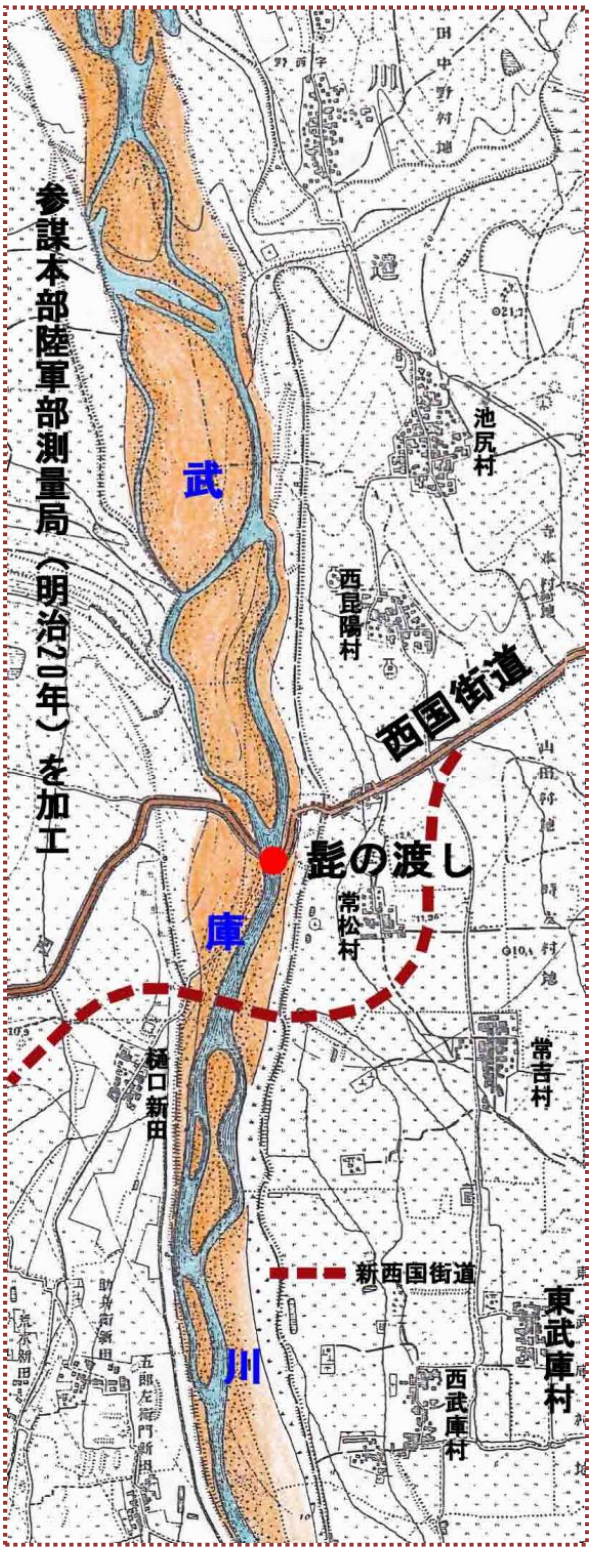

図-3 明治 20 年頃の「髭の渡し」周辺の地図

※2 国道 171 号：京都府京都市南区から兵庫県西宮市を経由して、神戸市中央区に至る一般国道である。西宮市から終点・神戸市までは国道 2 号との重複区間である。昭和 28（1953）年 5 月 18 日、二級国道 171 号京都神戸線として指定施行。昭和 40（1965）年 4 月 1 日、道路法改正により一級・二級区分が廃止されて一般国道 171 号として指定施行、同時に全線が建設省（現・国土交通省）管理の指定区間となった。

※3 二級国道：昭和 27（1952）年 6 月 10 日に公布された道路法によって定められた道路の種類である。昭和 40（1965）年 4 月 1 日の道路法改正により一般国道に統合され、廃止された。特別な事情がある場合を除き、新設、改築、維持、修繕その他の管理は都道府県知事が行うものとされていた。

■ コスモス園

「髭の渡し花咲き会」が行っているコスモス園の管理・運営は、多くの市民や事業者、県、尼崎市からの支援により維持されています。

阪神南県民局ではコスモスの種や肥料の提供、尼崎市では種まきや水やり、除草などの人的支援、そして種まきの地拵えなどは、（社）兵庫県建設業協会尼崎支部や尼崎造園事業協同組合が行っています。

しかし、この活動も財政難のため存続が危うい状況が続いていて、園内には募金箱が設置され、来園者に協力を呼びかけています。

写真-3 コスモスの種まき（平成23年9月8日）

また、今年は、９月３日（土）に予定していた種まきが、台風 12 号のために延期になり、９月８日（木）に行われました。平日にもかかわらず約 130 名の方が参加されたそうです。その後も施肥や除草などの管理を行い、例年に比べ開花は少し遅れましたが、11 月上旬にはたくさんの花をつけました。一般的なピンクや赤紫、白以外に、鮮やかなオレンジ色の「キバナコスモス」（写真-5・7）も彩りを添えています。

写真-4 コスモスの花にミツバチが

写真―5 キバナコスモスの花にもミツバチが

写真-6 コスモス

写真-7 キバナコスモス

コスモス

キク科コスモス属の総称。アキザクラ（秋桜）とも言う。一年生植物の草本で、茎は高さ 2～3m になり、よく枝を出す。頭花は径 6～10cm、周囲の舌状花は白から淡紅色、あるいは濃紅色。中央の筒状花は黄色。葯は黄褐色。通常、舌状花は８個。開花期は秋で、短日植物の代表としても知られる。秋に桃色・白・赤などの花を咲かせる。日当たりと水はけが良ければ、やせた土地でもよく生育する。「コスモス」はギリシャ語の「宇宙」の「秩序」を意味し、ラテン語で星座の世界 ＝ 秩序をもつ完結した世界体系としての宇宙の事である。メキシコにいたスペイン出身の聖職者が中南米原産のコスモスをみて、花びらが整然とバランスよく並んでいることに、ギリシャ語の（調和）と名付けた。

■ モノローグ

「土木」の字を分解すると「十一」と「十八」。ということで 11 月 18 日は「土木の日」。

「土木」の語源は、前漢の武帝の頃、淮南王劉安（紀元前 179 年～紀元前 122 年）が学者を集めて編纂させた思想書『淮南子（えなんじ）』という書物の第十三巻『氾論訓』にあるといわれています。

そこには、「昔、民は湿地に住み、穴ぐらに暮らしていたので、冬は霜雪や雨露に耐えられず、夏は暑さや蚊・アブに耐えられなかった。そこで、聖人が出てきて、民のために土を盛り材木を組んで室屋を作り、棟木を高くし軒を低くして雨風をしのぎ、寒暑を避け得た。かくして人びとは安心して暮らせるようになった」という意味のことが記されており、この中で聖人が行った「築土構木」のうち材料の部分をとって「土木」という言葉ができたといわれています。

「氾論訓」から

古者は民　澤處し　復穴し
冬日は則ち　霜雪霧露に勝えず
夏日は則ち　暑熱蚊虻に勝えず
聖人及ち作り
之が為に土を築き木を構へて
以て室屋と為し
棟を上にし　宇を下にして
以て風雨を蔽ひ
以て寒暑を避けしめ
而して百姓之を安んず

濁音が多く、3K とか言われてあまりいいイメージを持たれていませんが、このように「深イイ」言葉なのです。

現代社会において、「築土構木」つまり、土を築いて堤をつくり、木を高く構えて建物・橋をつくるなど、社会基盤の整備を行い、人々が安全で安心して暮らせる生活環境を確保することが我々「土木」技術者に課せられた使命です。

漢の時代には聖人が行っていたことを、今は我々「土木」技術者が担っているのです。もちろん我々は聖人ではありません。だから、だからこそ、謙虚な気持ちで、かつ、誇りを持って日々の仕事に取り組んでいきたいものです。

【参考資料】

1 『甲東村から』 渡辺久雄　平成５年 12 月
2 『播磨の街道～『中国行程記』を歩く』 橘川真一　平成 16 年１月
3 『下大市今昔物語』 松岡孝彰編著　昭和 38 年３月
4 『甲武橋』 Web 版尼崎地域史事典『apedia』
5 『国道 171 号、二級国道、コスモス、淮南子』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
6 『土木語典～土木の語源』 「酔哲庵日常」HP
https://mizunotech.net/dobokugoten/dobokugoten_01.html

※発刊：平成 23（2011）年 11 月 『ひょうご水百景』No.6
改訂：令和　８（2026）年　４月 『ひょうご水百景』No.6